
モンスターハンター-DG ーDeath.Guardianー

KJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターD G I Death・Guardian I

【Nコード】

N3402Z

【作者名】

KJ

【あらすじ】

これは存在するはずない。人が世界を統べることができなかつた世界のお話。人はただ戦い、傷つき、生き抜こうと死力を尽くしている。そんな世界で、死神となった一人の青年。いや、ハンターのお話。

青年はただ一人、死神の鎧”デスギアシリーズ”を身につけ、孤独に戦っていた。そんな彼を尊敬し、憧れを抱いた少女がいた。そして少女は青年の弟子となり、共に街を守るために狩りを続けていく。そうして次第に暴かれていく青年の過去。彼はなぜ”デスギ

ア”の鎧を身に付けているのか、そして青年の過去が暴かれていくにつれて街には不気味な雰囲気漂い始める。モンスターハンター2Gをもとに”デスギア”シリーズの鎧を身に着けた青年を描いた長編小説！！

今ここに英雄の名を刻もう・・・

モンスターハンターシリーズの外伝です。個人的に”デスギア”シリーズの防具が好きなので、主人公に着せて作ってみました。

モンスターハンター2Gをもとに考えているので、それ以降のモンスターは出てきません。資料があまり手に入りにくいのでモンスターの表現や装備は曖昧ですが、なんとかやっていこうと思います。

第一話 死神（前書き）

今回初めて外伝を書きますKJです。これとは別に作品を作っている最中なのですが、同時並行でこの話も進めていこうと思います。最悪どちらかが遅れることもあるかもしれませんが、がんばります。正直なところ、三人称で話しを進めていくのは初めてなので中々うまくいきませんでした。どうぞご覧ください。

第一話 死神

かつて人が世を統べるよりも遙か前、人は生存を求めて人よりも遙かに進化を遂げた生命体と戦い続けていた。人はそれら生命体を――モンスターとよんだ。

そうして何十年、何百年もの戦いが続き、モンスターが更なる進化を遂げ続ける一方で人も又進化を遂げた。モンスターと戦う為の知恵を身に付けたのである。そうしてモンスターを倒すために造られた“ギルド”という名の組織。その組織に所属している、モンスターを狩ることを仕事とする“狩人”。

ギルドが一般又は、王族からの依頼を受け、狩人がそれを実行する。そうして狩人は倒してモンスターの部位の一部を剥ぎ取り、それを元に新たな力を手に入れる。

そんな戦いの螺旋が今なお続く現代。ギルドは昔から変わらず様々な依頼を受け持っている。

いつからだろうか。人は狩人のことを敬意をもってこうよんだ。

モンスターを狩るためだけの存在、“モンスターハンター”と……

……

そこは深い樹海の奥。そこらかしらに見上げるような大木の枝が地面へと突き刺さっているその場所は、普段ならあまり“人”の訪れることがないであろう静かで平穏な場所であるはずだった。しかし、そこも今となっては荒れ果てた戦場と化している。

地は抉れ、キノコや草を求めてやってきたのであるう、野生の豚モスは今の姿からはその原型を連想するのは難しい程に無残に切り刻まれ、その血液を地へと染み込ませていた。

そんな汚れた場所にいたのは、一体の死神と、一匹の迅龍と呼ば

れている龍だった。様々な街、そしてギルドが恐れている、古くから存在していたといわれている龍。古龍種である迅竜ナルガクルガ。数あるモンスターの中でも群を抜く程の跳躍力。そして両腕、尻尾に備えた無数の鋭いブレードは、目撃したら最後。ブレードに切り裂かれて、原型も残らない程の肉片へと変えられるか。尻尾に潰されて、原型が分からない程に押し潰されるか、どちらにしても生きて逃げ延びるのは困難と言われている。これまでに何百というハンター達がナルガクルガに挑んだが、戦いを挑み生きて帰ってきた者達。狩猟を成功させた者達は数少ない。殆どのハンターはその姿を前にただ餌食となるだけだった。

しかし、そんな人間にとつての“脅威”も今となつては左腕のブレードを完全に破壊され、体中の至る所には深い切り傷が目立っており、体中に己の血液を点々と散らしている。やったのは、命を刈る為だけに存在する、デスサイズという名の鎌をその手にしている一体の死神である。いや、“デスギア装備”を身に付けた一人のハンターといったほうが正しいのだろうか。しかし、そのハンターは“死神”と呼ぶに相応しい程の存在感をその身から漏らし続けている。

全身をロボロボのフード。そして肩や節などの部分を鍛え上げられた骨のような装飾を付けたその鎧は、まるで死神が着るためだけに造られたかのような鎧だった。フードの奥の髑髏の兜が持ち主の心情を隠すように、そして殺すかのような雰囲気醸し出している。“デスギア装備”。それは砂漠から稀に採取することが出来る、ロボロボのフードと幾つかの手に入れ難い素材を用いて造られる謎の多い防具の一つである。何故そのような防具が発案され、その設計図が各街の鍛冶屋へと送られたのか。そして砂漠から稀に採取することが出来る謎のフードにはどんな効果があるのか。その全てが謎に満ちており、昔から、「フードは砂漠でモンスターによって殺された者達の怨念の集合体で、デスギア装備を身に付けているハンターは亡霊に体を操られている」などといった噂がたつ程に、評判の

悪い防具である。

ハンターの肩が動き、体力の消耗を表す。それはデスギア装備を身に付けているリスクでもあるが、それ以前にハンターの体力もまた、数時間の迅龍との戦闘で疲労しつつあったのである。しかしハンターから漏れ出している存在感は一向に消えようとしなない。

「……………死ね」

ハンターがデスサイズを手に目の前の龍へと駆ける。その速さは身の丈以上の大きさをもつ鎌を持っているとは思えない程に素早く殆ど一瞬とよんでいい程の速さで鎌の間合いに龍の首元が入り、駆けていた足に急ブレーキを掛け、その勢いをのせてハンターは手にしている鎌を横方向へと振るう。それはデスサイズの用途を十分いかした攻撃だった。つまり“命を刈る”攻撃。

「!!!!!!!」

しかし、ハンターは咄嗟に横へと振っているサイズの上に片足を勢いよく下ろし、鎌の軌道を首元から地面へと変更させた。駆けた勢いと、片足による勢いとが合わさって鎌の刀身は「ザクツ」という重く押し掛かるような音と共に、半分以上が地面へと突き刺さる。しかし、そんなことは気にせず、彼は鎌から手を離し、両手をそれぞれの耳に当て、外界からの音を遮断する。

瞬間、耳を刺激する強烈な咆哮。気がつくと先程まで鎌の間合いに入っていたはずの迅龍は彼と大きく距離を開け、その場で雄叫びを上げていた。同時にその姿は様々な場所に血管が浮き上がり、そして目元も赤へと変わっていく。耳を塞いでいたことにより雄叫びでの混乱は防げたが、それでも彼の耳には少なからず痛みが走っていた。しかし、もしあの瞬間鎌の軌道を変更しなければ彼の攻撃は空を切り、その間に発せられた雄叫びによって鼓膜が破られていたことだろう。

急いで鎌を地面から引き抜こうとする、しかしそれよりも早く迅龍は尻尾に付いている無数のブレードの内の数十個を彼に向かって射出した。それは遠心力を使って尻尾をなびかせて行う攻撃だが、

普段よりも身体能力が上がっている今の迅龍の攻撃は一般人なら目で追うのがやっとであるう程に素早く、そして恐ろしいものである。しかし、ハンターはそんな時でも冷静だった。「抜くのが駄目なら」と心の中で呟き片足を鎌の屈折した刃へと向けて放つ。そして勢いよく放たれた足蹴りの勢いに乗って地面を割って姿を現した鎌の刀身を横へと向け、高速で飛来してくるブレードに向かって一閃する。鎌の一閃によって払い落とされた数十のブレードが地面を抉り、その内の数枚のブレードが彼の体に鋭い切り傷を残していく。噂通り、ブレードに切り裂かれた切り傷からは多量の血液が吹き出す。しかし、それを気にせずただ目の前で鋭い視線を向けてくる迅龍へと身構える彼だが、体の方はその傷によって確かな鋭い痛みを感じていた。

その数秒のやりとりの後に訪れる沈黙。ハンターにとってその数秒は次にくる敵の攻撃を待ち構える為の数秒。そして迅龍にとっては、啞然としている数秒。龍とは何百年も生きてきている生物。それ故に多少の知能は兼ね備えている。その多少の知能は今焦りというデータで埋め尽くされていた。普段なら怒りの感情が上がると共に、体の身体機能を飛躍的に上げることができ、先程のように高速での行動ができる迅龍ナルガクルガ。その行動がこれまでに何十、何百ものハンターを始末してきたはずだった。それが今壊された。あの連続攻撃を避けたハンターなどこれまでに遭遇してきたことがなかったのだ。そして焦りは、まだ手に入れてない「ワカラナイジヨウホウ」へと変換され、それが脳内の身体機能をもう一度向上させる。

そしてもう一度、しかし焦りのせいで先程よりも小さく雄叫びを上げ、今度は体ごとハンターへと襲い掛かる。ナルガクルガは体こそ小さいほうだが、それはモンスターの世界においてのことで実際には人間など見下せるほどの大きさをもっている。そんな体が押し掛かるようなことがあるれば、どんなハンターでも一撃で死んでしまふということだ。しかし、ハンターはそれに怯む事無く、その行動

をよんでいたかのように、それよりも早く鎌を持つ両手を強め、殆ど同時に飛び掛ろうとしていた迅龍へと切りかかった。二つの影が重なり合う。そしてそれは互いに背を抜けていけ、それぞれのいた場所が瞬間にして入れ替わり、静寂が訪れる。

静寂は「ギンツ」という音で破られた。それはハンターの手にしていた鎌が宙を舞う時に発せられた音。しかし、同時にハンターの後ろでは片足と片腕を切断された迅龍がその場で悶え始める。その切り口からは人間では考えられないほどに多量の血液が溢れ出ており、モンスターの中でも上位に入るほどに回復能力が速い“古龍種”のナルガクルガでも、このままでは明らかに死を間近にしていることが容易に想像することができる。そう“睡眠でもとって回復能力を速めない限り”。

ハンターはまるで迅龍の動きを操っているかのような感覚で通り、迅龍はその場から最も跳躍しやすい場所まで移動して、この付近から逃げ出そうと必死に逃走を図ろうとしている。片腕・片足を失っているのに、今だ止まることのない血液で地面を汚しながら必死に逃走を図ろうとしている迅龍を横目に、ハンターは先程飛んでいった鎌が突き刺さった地点へとゆっくりと歩を進め、それを手にした。そしてまたゆっくりと歩いて迅龍の元へと近づいてゆく。その光景はまるで本物の“死神”そのものだった。

ハンターの顔はフードの下の髑髏の兜で見えないが、「お前はとうせ死ぬんだから、せめて一秒でも抗って見せる」といつているかのような錯覚を感じる程に、ハンターからは初めよりも“死神”のような存在感が濃く感じられる。

その光景では誰が見ても迅龍の心情は見取れたものだろう。龍の心情など、それ以上にモンスターの心情など、分かる人間など世にはいないが、それでも今のナルガクルガの心情は“恐怖”以外に考えられなかった。それはナルガクルガの表情を見ても分かる。普段は恐ろしいはずの顔も今となっては、まるで恐怖を浮かべる人間のようなそんな表情が見て感じられた。

そしてナルガクルガの寿命を告げる合図が発生する。

ビリビリビリビリ

ハンターは最後の最後まで気を抜かなかった。さっきのゆっくりとした行動は別に楽しんでいた訳ではない。確実に、効率よく狩猟を成功させるための最良の手段だったのだ。

目の前では「シビレ罨」に引つかかった迅龍が力なく、逃げるために体を必死で動かそうともがいている。とはいっても体全体が痺れているうえ、多量の血液不足によってもう力は殆ど残っていないのだろう。ハンターはゆっくりと、罨を踏まないように迅龍の背に乗り、上から首へとその鎌の刃先をあてる。もう迅龍は何も口から音を発しなかった。それは諦め、死を覚悟したからなのかどうかは、はっきりとはわからない。しかし、次の瞬間にはそれは永久に解けない謎へとなった。

「ボドツ」という音と共に罨が解除させる。そして無くなった首元からはまるで噴水のように真っ赤な血液が溢れ出、それをまるで仕事終わりのシャワーといわんばかりに受け止めるハンター。そして血の雨が止み終わった頃、その場からハンターはゆっくりと退散していった。

依頼内容は迅龍ナルガクルガの撃退。

しかし、その場所に残っているナルガクルガの死体はまるで“食われた”かのように、まるで残飯のように、四肢から臓器まで全てがバラバラとなっていたのを依頼主が気づいたのはそれから一カ月後。ハンターが“ギルド”の受付嬢に進められて“ニツケル村”へと到着したその日だった。

第一話 死神（後書き）

下手な文章ですみません。けどとりあえずこれからも書きたいことを書いていこうと思います。これからどうなるかはわかりませんが、これからもよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402z/>

モンスターハンター-DG -Death.Guardian-

2011年12月11日18時47分発行